

日本ペスタロッチャー・フレーベル学会 関西地区研究会

平成 23 年度 第七回課題研究院会・近畿地区議事録

日時；平成 24 年 3 月 10 日（土）13 時 30 分～17 時 30 分

場所；龍谷大学深草校舎 8 号館 1F 第 5 共同研究室

参加者；宍戸健夫、松川礼子、田岡由美子、藤井恵美子、劉蓮蘭、西小路勝子、
篠原いくよ、石川道夫

欠席者；渡邊満、酒井玲子、荘司泰弘、浅野俊和、柏原栄子、澤田真弓

[研究会の主旨]

2009 年秋スタートの日本 PF 学会の課題研究は、テーマを「子育て支援」とすることになった。従来、どちらかという教育理論、教育史的な研究に重点を置いてきた本学会が、時代や社会が求めている重要な課題に取り組んでいくという画期的な研究テーマであり、2012 年に政府が予定している幼保一元化を見据えて「子育て支援」の在り方を学会としてどのように提言していくかを課題としている。

1. 研究報告

○藤井恵美子「幼稚園における子どもたちのための庭園—フレーベルの足跡を訪ねて—」

- ・兵庫大学短期大学部の藤井恵美子会員が、今日のドイツのフレーベル主義の幼稚園における園庭の位置づけと活用ということで、本年 2/26 から 3/2 まで、ドイツのバート・ブランケンブルグの AWO（日本で言う生協に近いもの）のフレーベル幼稚園（Fröbelhaus）とフレーベル博物館を見学、調査されてきた成果の一端を報告。同行された同短期大学部非常勤の西小路勝子、篠原いくよの両先生も、研究会に同席。
- ・フレーベル博物館のロックシュタイン館長へのインタビューは、まだ編集されていないとのことで、今回はスライドショーでフレーベル幼稚園の方の参加見学を中心に紹介された。
- ・3 人の先生がそれぞれ別のクラスについて、幼児と係わり、園児たちの日常生活を観察したものをスライドで紹介。幼稚園は小学校に隣接しており、園庭はかなり広いものの、室内はそれほど広くはない。それでも机や椅子など、すべて木製で自然の質感があり、日本の現場から見ると贅沢な印象を与える。逆に、ピアノ、オルガンといったものがなく、先生たちは歌の指導はすべてギターを使用している。ギターなら演奏しつつ、子どもたちの様子がよく見られるからと、合わせてピアノは高価で買えないという切実な問題もあるとのこと。
- ・恩物の使用については、恩物を箱から取り出すところから、最後までの手順。恩物で

遊んでいる最中に「鳩の家」のようなお遊戯が間に入ったりといった報告は、出席者の関心を惹いた。また恩物の遊びの際に使う木のプレートにマス目が引いてあり、裏面にはマス目がなく、表でも裏面でも遊ぶとか、幼児の年齢に合わせて恩物のサイズの違うものがあるというのも、興味深い報告であった。フレーベルの恩物が、今も生きて、工夫を加えて活用されているさまは、国内の伝統ある幼稚園などで、恩物が既に使われず埃をかぶって仕舞いこまれていたりする現状と対照的である。

- ・クラスの名前のつけかた、お食事当番、お昼寝などの様子も、日本国内のそれとは微妙に違っており、また画面の中に写っているドイツ語を読んでもみると、改めて興味を掻き立てられるものも多々あり、活発な質疑応答が交わされた。
- ・フレーベル博物館では、マーレンホルツ=ビューロー夫人のまとめたフレーベル幼稚園教育学の中に出てくる園庭の花壇の計画書を持参し、ロックシュタイン館長にインタビューされたところ、実際には実現されなかったものだがとの断りつきで、出してくられたものが、持参の園庭の設計図の両脇に、遊び場と運動場を付け足し、さらに周囲にバラの生垣が追加されたものだった。中央部分に子どもたちのために、一人ひとりに個人の区画の花壇があてがわれている部分の子どもの名前が、持参のものとは全く別物であった。この園庭兼花壇、もしくは菜園のようなものは、バート・ブランケンブルグのフレーベルの幼稚園の絵として紹介される畑とその向こうに教会がみえる絵があるが、この中に描かれている畑で間違いないのではないかと、宍戸会員からの指摘があった。設計図通りの花や野菜が作られていなかったかもしれないが、菜園は実際にはあったのではないかとの印象を強めた。今後、事実関係の確認が期待される。この菜園の部分、宍戸会員が現地を訪問された時には駐車場になっていたが、今回、藤井会員が訪問された時にはレストランになっていたとのこと、但し訪問された際には休業中で、レストランになった経緯など詳細はわからないとのことであった。

○宍戸健夫

「幼・小連携の問題とプロジェクト活動」

- ・宍戸会員は当初「陳鶴琴先生・生誕 110 周年の催しに参加して」というタイトルでご報告頂く予定であったが、この行事が 4/16-18 に延期されたということで、上記の表題での報告になった。
- ・報告は、2010 年 11 月に文科省の「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」で発表された「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」と題する報告書（以下、「接続の在り方」報告書と略）の提言内容に関するものである。この報告書は、白百合女子大学の無藤隆と東京大学の秋田喜代美を中心としてまとめられたもので、従来の研究を一步前進させたもの。その骨子が紹介された。

- ・近年の子どもについて、基本的な生活習慣、他者との関わり、自制心や規範意識に欠ける部分が多く、小学1年で学習に集中できず、授業が成立しない状況がある（小1プロブレム）。
- ・「学びの芽生え」の幼児期から、「自覚的な学び」の児童期への円滑な移行を実現するため、幼児期と児童期をつなぐ「接続期」に注目する必要があるだろう。実際には、幼少の教員の間には交流も少なく、互いに関心を持たないという事実もある。こどもに対する連続性・一貫性のある教育の推進が課題になっている。
- ・具体的な実践例として、和光学園の幼稚園と小学校の実践が、『育てたいね、こんな学力—和光学園の一貫教育』（大月書店、2009年）にもまとめられているが、幼稚園、小学校それぞれの側から接続期を意識しての試みとして幼稚園ではプロジェクト活動、小学校側では生活勉強といった取り組みがある。具体的な例として和光学園幼稚園の大瀧園長の公開研究集会での報告から、食をテーマにした一年の実践の中から、5歳児クラスが、農園にかぼちゃを植えたところ、その中に冬瓜が混じっていて、食からパーティーにプロジェクトの関心が動いていったという実践例が紹介された。
- ・かぼちゃを植えるという生活文化の獲得から、パーティーという文化の共有、人と共感し合うことの喜びを体験する方向へ関心が育っていく部分を1年の総合学習のベースプランと比較しながら、接続期の指導のポイントについての検討が行われた。

○次回は、6月16日（土曜）13時から、今回に引き続き龍谷大学の田岡先生に会場の方をお引き受け願うということになった。報告者としては、一人は石川が担当する予定であるが、他にはまだ決まっていない。報告希望者があれば申し出ていただきたい。

書記 石川道夫